無産者ハ國家權力ヲ奪取シテ先ヅ生産機關ヲ國有ニスル、然シナガラ斯クスルコトニヨリテ無産者ハ生産者トシテノ其レ自身ヲ廢絶シ、一切ノ階級差別及ビ階級對立ヲ廢絶シ、從ツテ又タ國家トシテノ國家ヲ廢絶スル、從來ノ社會ハ階級對立ノ範圍内ニ於テ動イテ居タモノデアルカラ國家ヲ必要トシタ、國家トハ要スルニ夫レ夫レノ時代ニ於ケル搾取階級ガ其ノ外部的生産條件ヲ維持シ、特ニ又タ被搾取階級ヲ當時存在セル生産方法ニヨツテ與ヘラレタ壓伏條件ノ下ニ强制的ニ抑置センガ爲メノ機關デアルガ、壓伏スベキ何等ノ社會階級モ最早ヤ存在シナクナルヤ否ヤ、階級支配ガ廢絶セラレ從來ニ於ケル生産上ノ無政府ヲ基礎トシタ個々ノ生存競爭ガ廢絶セラルルト同時ニ、又タ是ニ基ケル諸種ノ衝突ヤ過剩ガ除去サルヽヤ否ヤ、モハヤ特種ノ壓伏者タル國家ヲ必要トスル所ノ壓伏セラルベキ何モノモ存在シナイコトニナルト、社會事情ニ對スル國家權力ノ干渉ハ一ツノ部面カラ他ノ部面ヘト次第ニ不用トナリ、遂ニハ自然ニ寢入ツテシマウ、人ニ對スル支配ニ代ツテ物ノ管理ト生産行程ノ指導トガ現ハレテ來ル、國家ハ廢止サレルノデハナク自滅スルノデアル。

又た「レーニン」は其の著『國家と革命』に於て國家自滅說をなした、其の要旨に曰く

最後ニ共產主義ノ下ニ於テノミ國家ハ全ク不必要ナモノトナルデアラウ、何トナレバ此ニ於テハ他ヲ抑壓スルモノガ居ナイカラデアル、固ヨリ我等ハ空想家デハナイ、我等ハ共產主義ノ下ニアツテモ極端ナ個人ガ居ルデアラウト言フコトヤ、斯ノ如キ極端者ヲ抑壓スル必要ノアルコトヲ知ツテ居ル、然シナガラ抑壓ノ特別機關トシテノ國家ハモハヤ必要デハナイ、是ノ極端者ニ對スル抑壓ハ先ヅ第一ニ國民全體ニヨツテ爲サルヽデアラウ、恰カモ文明社會ノ群集ガ街頭ニ於テ喧嘩シテ居ルモノヲ引キ分ケル如クデアル、第二ニ我等ハ社會生活ノ準則ヲ破ル所ノ極端者ノ根本的ナ社會的原因ハ大衆ニ對スル搾取卽チ彼等ノ貧困デアルコトヲ知ツテ居ル、ソレ故ニ是ノ主ナル原因ガ除去セラルレバ國家ハ必然的ニ消滅スルヤウニナルデアラウ、我等ハ其ガ如何ニ早クヌ又タ如何ナル進化ノ段階ニ於テ消滅スルカハ知ラナイケレドモ、我等ハ其ガ必ズ消滅スルデアラウコトヲ知ツテ居ル。

と述ぶるは革命後に於て國家は自滅すると主張するのである。

㈡ 批判

上記の所說を約言すれば「マルクス」「エンゲルス」「レーニン」等の所說は何れも同一であつて無產者革命によりて無產者が一時專制をなすが、後には階級なるものが消滅する、階級が消滅すれば搾取するものもなく、搾取せらるるものもない、而して搾取又は抑壓をなすものが國家であるから國家も自滅すると言ふのである。

吾人の見る所を以てすれば、斯樣なる所說は彼等が自己の說を裏切るものである、何となれば「マルクス」は一切の歷史は階級鬪爭の歷史であり、一切の歷史は階級搾取の歷史であると言ひ、而かも是は科學的眞理であり空想ではないと言ふ、然らば過去現在に於て階級があれば未來に於ても階級が存在せねばならぬ、過去現在に於て國家があれば未來に於ても國家が存在せねばならぬ、若しも過去現在に於て國家があつて同じき時間の繼續たる將來に於て、國家がないとすればそれは科學的ではないからである、地球は無限の過去から現在まで太陽の周圍を回轉する、それ故に未來に於ても地球が太陽の周圍を回轉すると推定するのが科學的である、若しも地球が昨日まで太陽の周圍を回轉するが、明日は太陽の周圍を回轉せずと言へば是は明かに非科學的である、彼等の所說

は自家撞着である、要するに斯の如き議論には一顧の價値もない、「マルクス」は自ら科學的社會主義と稱するが其の眞實は一個の蜃氣樓的空想である。

一般に西洋人は一切を理智的にのみ考察するが故に、斯の如き論が生ずるのである、國家は人の先天性に基づく存在である、人は一方に於て理智を有すると同時に他方に於て感情を有する、この感情を有するが故に恩惠に感謝し援助に感謝する、この感謝の感情あるが故に人は恩惠を授け援助を與へたるものを尊敬し、是を上位となし自己は下位となる、これ即ち上下を生じ差別を生ずる根源である、上下の差別が生ずれば人間界に秩序が生じ、是の秩序あるが故に人間界が組織せらるるのである、而して人間界が組織せらるれは、こゝに絶對者が生じ政府が生じ國家が生ずるのであつて、即ち國家は人の先天性に基づきて生じたる生起である、それ故に國家は無始の過去より無終の末來にまで存するのである、固より國家にも完不完もあり、文野もあり、大小もあり、强弱もあるであらふが、然しながら國家は人の先天性に基づく生起であるが故に、人が存在する限り存續するのである、國家が自滅すると言ふが如きは全然虛妄の說である。

然しながら彼等の說に於て見逃し能はざるは、彼等が有する非國家思想である、「マルクス」は「ユダヤ」人である、斯の如く國家に對して毫末の愛着心がないから、彼には國家は不必要であり國家は寧ろ迫害であつた、其れ故に彼は國家自滅說をなして世界の人心を國家から離脫せしめんと欲したのである、其の『共產黨宣言』の終に於て「祖國ナルモノハ存在セヌ萬國ノ勞働者團結セヨ」と絶叫したのである、斯の如き國家に愛着心なき人、國家の恩惠に感謝せざる人の言は屢々沒道德となる彼は既に國家人にあらざるが故に、彼は國家に對する道德心を缺いて居る、從つて沒道德となる、是の如き人の說を聽かんとする者は國民として恥辱である。

第十節　總括的批判

「マルクス」「エンゲルス」等の考へたる物權主義政治學說は彼等が構造したる經濟論の延長であつて、政治說としては殆んど價値なきものである、彼等は政治說と經濟說とはその考へ方を異にすべきことを知らなかつたのである。

政治と經濟とは根本的に異るものである、政治は治者が被治者を治むることであるが故に、政治は人と人との直接關係であるが、經濟は是に反し人と物との關係であり、經濟に於ては物卽ち物質が經濟行爲の動機であり主因であるが故に、經濟的見地よりすれば世界は物質追求の世界である如く見ゆる、斯の如くして唯物哲學が成立し物質絕對說が成立するも、それは人間界を單に經濟の方面のみより見たる局部的考察であつて、人間界の全面的考察ではない、從つて「マルクス」が經濟が人間生活の礎石でありその上に宗教、道德、政治、法律等が構成せらるると考へたることは人間界に對する局部的考察であり僻見であつて誤である。

政治は治者が被治者を治むることであり、而してこの治められる被治者は宗教の如き精神的行爲をなす人であり、學問の如き理智的行爲をなす人であり、藝術の如き感情的行爲をなす人であり、卽ちあらゆる總ての行爲をなす人である、而して斯の如き人を治むることが政治であるが故に、政治的見地より見る人と經濟的見地より見る人とは異る人である、然るに「マルクス」「エンゲルス」等は政治人と經濟人とを同一視し、經濟人に對する考へ方を以て政治人を考ふるが故に、其の論の出發點に於て誤謬を來せる

ものである、是れ彼等の政治說が一顧の價値なき所以である。

元來西洋の哲學は知識の哲學であつて行爲の哲學ではない、而して知識に於ては生成變化の窮極原因たる本體が或は精神であり或は物質であると主張することは學者の見る所によりて如何樣にも說明せらるる、然しながら、道德、政治、法律、經濟の如きは總て行爲である、この行爲を論ずるに當り、知識哲學の一元論を以てすることは不當である、人のなす行爲は人が有する必然性と必爲性とによりて行はるるものであり、而してこの必然性の一は物質性であり必爲性の一は精神性である、卽ち人は物質性と精神性とを有する二元性なるものである、而してこの物質性と精神性との二元の中庸を得ることが卽ち人の行ふべき道である。

然るに西洋には行爲哲學が存在せず、從つて道を知らざるが故に、或は精神のみを根據とし或は物質のみを根據として行爲を論ずるが故に誤謬に陷るのである、殊に「フオイエルバツハ」は物質が萬物の本體なりとして唯物哲學を唱へ、而して是の說に贊同しこの哲學を根據として物質絶對說をなしたるものは「マルクス」である、而してこの哲學この學說が誤謬であることは論ぜずして明かである。

人は禽獸と異る、禽獸は自ら活きんが爲め食を得るに汲々たるものであり、物質的活動に汲々たるものであり、是れ以外に於て何物をも有せざるものであるが、人は宗教を有し學問を有し藝術を有し道德を有し政治を有し經濟を有する、而してこの宗教、學問、藝術、道德、政治の如きは精神的行爲である、然しながら人は衣食住を有するに非ざればその生存をなし得ざるが故に、同時に人は經濟的行爲をなすものである、卽ち精神的行爲と物質的行爲とを道により調和することによりて、人が人たり得るのであり是れ人が禽獸と異る所以である、若しも「マルクス」か言ふ如く物質的行爲卽ち經濟行爲のみが人間界の根抵であるならば、人は禽獸に墮したるものである、卽ち彼の主張する共產政治の根抵たる物質絶對說が誤謬であるが故に、是より演繹したる諸說は總て誤謬であつて取るに足らざるものである。

殊に「マルクス」は一切の社會は搾取者階級と被搾取者階級の對立であり抗爭であると言ふ、是の見解も亦た大なる誤謬である、人間界は親和と抗爭との二元的世界である、人は時として抗爭し鬪爭もするが同時に親和し協同もする、これが人間界の事實である、單位社會たる家族に於ては、時として夫婦喧嘩もすれば兄弟喧嘩もするが、多くは親和し輯睦するを常態とする、村邑に於ても時として土地の爭や水利の爭をなすも、多くは村人相互に親和し融和することを常態とする、國家に於ても時としては政權の爭奪をなし內亂をなすも平和なる時代を送るを常態とする、卽ち親和と抗爭とは人間界の二元的事實である、然るに「マルクス」が一切の社會は階級の對立であり鬪爭であると言ふは、人間界を眞に理解せざるものであり、從つて亦た人間界に存する道を知らざるものである。

殊に「マルクス」「エンゲルス」等は經濟上の資本家及び政治上の治者を以て搾取者であり勞働者及び被治者を以て被搾取者であると言ふ、是れ亦た大なる僻見である、人間界は一面に於ては親和協同の世界であり、他面に於ては反抗鬪爭の世界である、が故に、必ずしも勞働者の勞働を搾取するのみが資本家の仕事でもなく、被治者の膏血を搾取するのみか治者の仕事でもない、殊に資本家と勞働者とは同一生產事業を遂行する協力者である、この協力者が搾取者と被搾取者であり讎敵であるならば、何故に勞働者は資本家の命により其の勞働に從事するのであるかを諒解し得ざるが故に是れ矛盾の言である、斯の如き言も亦た人を理解せざるものであり、人間界を認識せざるものであり、畢竟資本家に對する嫉妬憎惡より來る僻見である、而して彼は人が人たる道は自己を考ふる

と同時に他人を考へ、自己を主張すると同時に他人を尊重することであるを知らざるが爲めである。

上記の如き僻見と嫉妬憎惡とを根據として「マルクス」「エンゲルス」等は極力資本家を罵倒し是を以て搾取者なり吸血鬼なりと呼號し、斯の如き資本家を倒すにあらざれば多數なる勞働者の貧困を救濟し得ずと考へたるが爲め、彼の餘剩價値なる經濟理論を捏造し、是を以て資本家か勞働者の膏血を搾取することを說明し、更にその理論を擴大して資本制經濟は遂に廢絕せらるべき運命にあることを論し、而して斯の如き運命にある資本家を倒壞し絕滅することは勞働者の任務であり、而してこれが成功したる後は勞働者が自ら政治權力を得て資本家に代り、こゝに共產社會を實現し得ると說くことは頗る巧妙であるが、然しながら「マルクス」等は人は唯だ物質的欲望の滿足にのみ汲々たるものであり、宗教も學問も藝術も第二次的なるものであるとの人性觀が誤れるが故に、物質觀に捉はれたる共產經濟のみを以て人間界を律し、人を治め得ざることは說明を要せずして明かであつて、彼等が自ら科學的社會主義と唱ふるも彼等の論も亦た一種の空想たるに過ぎざるものである。

殊に彼等が唱ふる國家自滅說の如きも彼が「ユダヤ」人であり國家を有せざる人であり、國家を嫌惡する人であるが爲め生じたる惡意の說であり、國家に對し毫未の愛着も毫未の恩惠をも感ぜざる無血無情の言であつて、是れ亦た人間界を呪咀したる惡魔の言であり、至大なる罪惡である。

然しながら更に「マルクス」「エンゲルス」等の所說の淵源に遡りて考察するとき、彼等の所說は「ロツク」や「ルーソー」がなしたる民權主義學說と同根一幹であることを見る「マルクス」「エンゲルス」等がなしたる所說は飾るに各種の論理を以てするが、畢竟個人の財產の平等を主張するに過ぎぬ、而して「ロツク」や「ルーソー」の民權主義學說は個人の權利の平等を主張したるものである、卽ち前者は個人の平等を唯物的に主張したるものであり、後者は個人の平等を唯心的に主張したるものであつて、其の異る所は物質と精神との差あるに過ぎざるものであり、而して共產主義者は切りに社會なるものを唱ふるも、これ個人主義を僞瞞する僞裝であつて、實は物質に對する個人の平等を唱ふるものであり、其の個人主義たるに於て同一である、而して道は自己を存立すると同時に他人を存立することであり、自己を考ふると同時に他人を考ふることであつて、自己のみ個人のみを考ふる個人主義が道にあらざること明かであり、要するに共產政治說も民主政治說も個人を主とする同根一幹の說である。

西洋人は道を知らざるが爲め、自己を反省せず他人のみを責むるものである、彼等は自己の受けたる幸福や恩惠に感謝せずして、他人の行ふ政治や專制や拘束のみを責むるものである、是に於て君主の行ふ政治の根源たる權力を考察の焦點となし、而して君主の行ふ所を以て總て暴政であり惡政であると思惟し、こゝに個人の平等を叫び、權利の平等を唱へ、彼等が自己を反省し君主より受けたる幸福や恩惠に感謝するを欲しないのである、而して民主政治の生じたる各種の弊害卽ち貧富の懸絕、下層民の生活困難を見るや、爲政者を以て總て資本家の傀儡となし、資本家の有する財力を考察の焦點となし、こゝに個人の財產の平等、物質の平等を主張し彼等は自己を反省し資本家より受けたる生活の資料と恩惠とに對して感謝することを欲しないのである、斯の如くして資本家の有する財力を國家又は社會の名を借りて奪取し、自ら是に代らんとするものであり、他人の非を鳴らしつゝ自ら是に代りて其の非を行はんとするものである、卽ち民主政治說と共產政治說との異るは其の考察の焦點が權力と財力との差あるのみであつて、自ら自己を反省せず他人の恩惠に感謝せずして、他人のみを責むることに於ては同一であつて兩者は同根一幹である。

今日の人、往々共產政治の不可なるを呶々するが、民主政治を可なりとなすもの多くあるが是れ大なる誤であ

る、共產政治と民主政治とは同根一幹であり、其の枝葉を異にするのみである、其の誤謬たるに於ては同一である、それ故に須らく西洋の政治學說を充分に批判し檢討し、彼等がなしたる誤謬を再びせざることを要する、共產政治は固より不可であるが、是と同根一幹たる民主政治も亦た道に反したる誤謬の政治たるを認識せねばならぬ。西洋人は知識哲學を有するも行爲哲學を有せず從つて理を知つて道を知らざるが爲め常に不幸禍害に沈淪するものである、見よ彼等は君主政治が行はるるや、切りに自由と平等を唱へ是を眞理なりとして君主政治を廢して民主政治を行ひたるも、この政治も亦た弊害百出し多數人民の赤貧と生活の困難とを來たし、是を救はんとして物質の絕對と財產の平等とを唱へ、是を眞理として露國に於て共產政治を行ひたるも、この政治も亦た弊害百出し連年の飢饉と多數貧民の餓死とを見、常に阿修羅の世界と地獄の世界に呻吟しつゝあることは、實に憐れむに勝へさるものであるが、是れ皆な彼等が道を知らざるが爲めである、即ち自由のみは道ではなく、平等のみは道ではなく、精神のみは道ではなく、物質のみは道ではなくして、自由と拘束との中庸を得ることが道であり、平等と差別との中庸を得ることが道であるが、西洋人は是を知らざるが爲め常に道の一端を以て事に處せんとし、其の過誤を繰り返すのみであり、常に苦惱に呻吟するのである。（拙著人間界の哲學參照）是を要するに「マルクス」「エンゲルス」等の物權主義學說の主張は政治を論ずるに政治的考へ方を以てせずして經濟的考へ方を以てし、人間界を政治的に考へずして經濟的に考へ、人性を政治的に考へずして經濟的に考へたるが爲め、こゝに物質絕對說を生じ、是を根據として『經濟學批判』を作爲し、更に『資本論』を作爲して多くの論理を構成したるも其の人性觀世界觀及び政治觀が誤謬なりしが爲めその結論は總て誤謬であつて眞の學ではない。

第八章　西洋政治學の綜合批判

第一節　總　說

前諸章に於て吾人は西洋の法權主義、神權主義、君權主義、民權主義及び物權主義政治學說を批判したが、更に是等の諸說を綜合的に觀察し、概括的批判をなし讀者の理解を容易ならしめんとするものである。

第二節　人間と自然

政治は治者が被治者を治むることであり、自然界に於て行はれずして人間界に於てのみ行はるるものであることは說明を要せずして明かである、それ故に政治を論ずるには先づ人間界と自然界とを明かにしなければならぬ。人間界を時間的卽ち動態として觀察すれば、この世界は波動的變化をなす世界であり、卽ち隆昌時代と衰頹時代とを交互する世界であり、統一時代と分裂時代とを交互する世界であり、戰爭時代と平和時代とを交互する世界であり、精神時代と物質時代とを交互する世界であつて、其の變化は波動的に進行するものであり、從つて正負的二元的變化をなす世界である、是に反し自然界を時間的に觀察すればこの世界は一方的變化をなす世界である、卽ち地球は太陽の周圍を絕へず同一方向に回轉し、月も亦た地球の周圍を絕へず同一方向に回轉し、總ての無生物は常に地球なる同一方向に落下し、植物は春發芽し夏繁り

秋凋み冬枯るる同一變化を繰り返すものであり、昆蟲も亦た春夏秋冬と並行して生滅するものであり、其の變化は一方的である、即ち自然界は無正負的一元的變化をなす世界であり人間界と異る世界である。

又た人間界を空間的に觀察すれば、この世界は宗教と經濟とか存し即ち精神と物質の對立の世界であり、學問と藝術とが存し即ち理智と感情の對立の世界であり、道德と法律とか存し即ち差別と平等の對立の世界であり、平和と鬪爭とが存し即ち親和と嫌惡との對立の世界であり、統一と分裂とが存し即ち統制と自由との對立の世界である、即ち人間界は正負的二元的の世界である、是に反し自然界に於ける物は對立をなさずして同一系列をなすものであり、物質の原素は原子量による正しき系列をなし、植物は其の類と種に從ひて正しき系列をなし、動物も亦た然りであつて對立をなさざるものである、從つて自然界は無正負的一元的の世界であつて人間界と異るものである。

上記の如く人間界は時間的にも空間的にも正負的二元的世界であり、自然界は時間的にも空間的にも無正負的一元的世界である、而して斯の如き正負的二元的世界に存するものは道であり、無正負的一元的世界に存するものは理である、從つて道は二元的なるものであり理は一元的なるものである、而して道は理想を達成せしむる所以のものであり動機が目的を達する所以のものであるが、理は窮極原因たる本體が現象を生ずる所以のものであり原因が結果を生ずる所以のものである。

然るに西洋政治學は人間界と自然界とを同一視し、自然界に存する法則即ち理が人間界にも存し、即ち「ロゴス」は自然界に存すると同時に人間界にも存するものとなし、而して法則即ち理に從ふことが人の行ふべきこと即ち道であるとなしたるものであり、斯の如くして法律は法則であるとなしたるものである。

法律は自然法に準據すべきものであると主張したることも亦た、人間界と自然界とを同一視したるものであり、人間界は二元の世界であり自然界は一元の世界であり、異る世界であることを知らざるが爲め多くの謬說を爲したるものである。

第三節　行性と知性

政治は治者が被治者を治むることであり、治むることは即ち行爲であつて知ることではない、それ故に政治を論ずるには先づ人の行爲性と知識性とを充分に知ることを要する。

人は行爲性と知識性とを有するものであり、而してこの兩性は異るものである、即ち人の行爲性は必然性と必爲性であり、詳言すれば自存性と他存性であり、自愛性と他愛性であり、自敬性と他敬性であり、自利性と他利性であり、自規性と他規性等であつて正負的二元的なるものである、是に反し知識性は主觀性であり、理智性であり、必然性であつて無正負的一元的なるものであり、是の兩性は全然異るものである。

然るに西洋の政治學者は人の行爲性と知識性とを同一視し「ギリシヤ」の學者は人は理性に從ふて行爲するときは正しく行ふことを得ると言ふ、この理性は即ち知識性であつて行爲性ではないが、この兩性を同一視したるものである、又た中世に於ける學者は基督教の教義に從ひ人は生れながらにして罪あるものであると言ふことは人の必然性のみを見て必爲性を見ざるものであり、又た啓蒙時代の學者たる「ホツブス」「スピノーザ」等は人は盲目的欲望に支配せらるるものであり、他人の幸福を嫉み他人に對し復讐を思ふものであるとなし、人の行爲性を以て惡なりと斷定し、「マギヤヴェリー」の如きは人は生れながらにして惡人であると唱へたるも亦た人の行爲性の一

面たる必然性のみを見たるものであり、又た「ロック」「ルーソー」等は人は生れながらにして他人と協同し他人を愛好するものであると唱へたることは人の行爲性の一面たる必爲性のみを見たるものである、即ち西洋の學者は或は行爲性と知識性とを同一視し、或は行爲性の一面たる必然性のみを主張し、或は他の一面たる必爲性のみを主張するものであつて何れも誤れるものである、而して斯の誤れる人性觀によつて政治を論ずるが故に謬説を爲したるものである。

第四節　理想と本體

政治は治者が被治者に對して行ふ行爲である、而して行爲は如何なる行爲にても目的を有するものであり、而してこの行爲の窮極目的は即ち理想であり、而して是の理想に到達せしむる所以のものが即ち道である、それ故に政治を論ずるには是の理想と道とを根據として論ずることを要するのである。

然にる西洋の政治學は政治を行爲として論ぜず、是を知識として論ずるものであり、且つ西洋の自然哲學をそのまま人間界に移して論ずるものであるが故に理想と道を根據とせずして知識上の窮極原因たる本體と而して本體より現象を生ずる所以の理を根據として政治を論ぜんとするものである、即ち世界の本體は或は水、或は空氣、或は原子の如き物質的本體又は觀念或は精神原子の如き精神的本體と是より生ずる「ロゴス」即ち法則を根據となし、人間界に存する法律も亦た法則であるとなし、人は法則に從つて行爲すべきものと考へ、從つて亦た自然界に存する法則即ち自然法は人間界にも行はるべきものとなし、總ての法律の根柢たるべきものと主張し、是の自然法説より自然狀態説を生じ、自然人權説を生じ、斯の如くして法則即ち理を根據として政治を論ずるものであり、毫も人間界の理想即ち道德的至善の世界或は永久平和の世界の如き理想を考ふることなく、從つて是の理想を實現すべき道を論ずるものではなかつた、それ故に西洋政治學は政治を行爲として論ずるものではなく、是を知識として論ずるものであり、而かも自然界の理をそのまゝ人間界に持ち來りて論ずるか故に、人は物となり人間界は自然界に墮するに至つた。

加之斯の如き考察により政治上の理想を根據とすることなく、單に事實より本體を探求し原理を探求し得たりとするも過去現在の事實が禽獸の域を脱せざるものであつたならば、その原理も亦た禽獸の域を脱せざるものであるが故に是の原理により政治を行ふときは、毫も人間界を向上し善導し得ざるものであるが故に眞の政治學たり得ざるものである。

第五節　規範と法則

政治は治者が被治者を治むることであり、而して治むる手段の一として法律規則を發布し、被治者をして是に從つて行爲せしむるのである、而して法律は人の行爲を規律するものであるが故に規範である、それ故に政治を論ずるには先づ規範と法則とを明かにしなければならぬ。

規範には道德規範、政治規範(即ち法律)、經濟規範等かあるが何れも人の行爲を規律するものであり、而して人の行爲は必然性と必爲性によつて行はるるものなるが故にこの行爲を規律する規範も亦た一面に於ては必然性であり、他面に於ては必爲性なるものであり、即ち二元性なるものである、而してこの規範の根柢たるものは即ち道である。

是に反し法則は因果必然の因つて生する所以のものであり、而して原因結果の關係を理解することは即ち知識であり、而して知識は人の理智性によつて得らるるものであり、是の理智性は即ち合理性であり必然性であるが故に是の知識を可能ならしむる法則も亦た合理性であり必然性であり、即ち法則は一元性なるものである、而してこの法則の根柢たるものは即ち理である。

然るに西洋の政治學者は規範と法則とを同一視して說をなすものである、即ち「ギリシヤ」時代の學者は自然界の法則は人間界の法律であると主張したが、法律は行爲を規律する規範であり、行爲を可能ならしむる道であり、法則は知識を可能ならしむる理であつて異るものであるが、是を同一視したるものである、斯の如くして自然界に於ける法則たる自然法は人間界の法律の根柢たるものであるとなすことも亦た。規範と法則とを同一視したるものであつて誤である、而してこの自然法說を根據として或は自然狀態說を主張し或は自然人權說を主張し、是より君權主義又は民權主義の學說を爲したが故に、是等の諸說も亦た誤謬たること明かである。

第六節　原道と原理

政治は治者が被治者に對して行ふ行爲である、而して行爲は道によりて行はねばならぬものであるが故に、政治も亦た道によりて行はねばならぬものである、而して道の本質は德と力とであるが故に、政治を行ふの道は既記の如く道德と權力とを並び行ふことであり、從つて德治と法治とを並び行ふことであつて是が政治の原道である。

然るに西洋政治學は政治の原道を探求せずして、政治の原理を探求し是を以て權力のみであると斷定し、而して政治原理たる權力が何によつて生じたるやを探求して生じたるものが君權神授說であり、君權武力說であり、君權契約說であつたが、何れも權力を以て政治の原理となしたるも是れ皆な誤である、而して西洋の學者は政治の原理を權力のみとなすが故に、治者は是の權力を濫用し妄用し、毫も道德を顧ざるが故に遂に民心を失し、人民をして蜂起せしめ政治革命を斷行するに至らしむるのである、即ち西洋の學者の探求したる原理なるものは政治の本質の一面のみを認めて他の一面を認めざるものであつて誤であつた。

斯の如く政治の原理を以て權力のみとなすが故に、是の權力のみによる政治即ち法治を主張するのであるが是れ亦た誤であつた、何となれば政治の本質が德と力であるか故に、政治をなすの道は德治と法治とを並び行ふことであらねばならぬからである。

斯の如き誤謬の生ずる所以は、知識は一元的なるものであり、從つて理も亦た一元的なるものであるが行爲は二元的なるものである、然るに西洋人は行爲たる政治を行爲となさずして知識として考察し、而して是により一元的なる理を探求するが故に道の一面たる必然即ち力を認識するのみであつて道の他の一面たる必爲即ち德を認識せざるものであり、而して西洋人は行爲が必然と必爲との二元性であり道も亦た必然と必爲との二元性であることを知らざるが爲め、即ち理を知つて道を知らざるが爲め斯の如き謬說を爲したるものである。

第七節　道德と權力

政治は治者が被治者に對して行ふ行爲である、而して總ての行爲は道に據つて行はねばならぬものであるが故に、政治も亦た道に據つて行はねばならぬ、而して道とは必然と必爲とを兩立せしむるものであり、必然の本質

は力であり必爲の本質は德であるが故に、道によりて行ふべき政治の本質も亦た力と德であらねばならぬ、卽ち政治は一方に於て權力によつて行ふべきものであり、他方に於て道德によつて行ふべきものである、是が正しき政治の道である。

然るに西洋の學者は「ギリシヤ」の古代より今日に至るまで、政治を以て權力行爲であると斷定し、政治とは權力を以て人民を統制することであると獨斷し、是によつて政治を論ずるものである、卽ち「ギリシヤ」の學者「プラトーン」「アリストテレス」等が是を主張してより今日に至るまで權力統制の根本思想は變更しなかつた、而して政治を以て權力統制であると考ふるが故に、是の權力は何によつて生じたかが問題となり、こゝに君權神授說、君權武力說、君權契約說等が生じたが、西洋の學者中政治に於て治者の道德が必要であり政治の他の一面が道德であることを主張したるものがなかつた、是れ彼等は道を知らざるが爲めであつた、それ故に斯の如き政治學は眞の學ではない。

上記の如く西洋人は政治を以て權力統制であるとなすが故に、古來西洋の爲政者はこの權力を濫用し妄用するの傾向を有し、殊に歐洲の中世以來勢力を得て中央集權をなしたる君主等は其の權力を濫用し、或は名譽心に驅られて無用の戰爭を惹起し、或はその私欲の爲め豪壯華麗の宮殿又は莊園を設け、酒池肉林の宴遊をなし、是等の諸費の爲め人民に對し苛斂誅求を行ひ、租稅を納付し得ざるものを牢獄に投ずるが如き暴行を敢てしたるが爲め、人民の怨嗟を招き遂に政治革命を斷行し、君主政治を廢絶するに至りたるは皆な政治を以て權力統制となしたるが爲めであり、政治に於て權力と共に道德が必要なることを知らさるが爲めである。

第八節　絕對と相對

政治は治者が被治者を治むることであり治者が被治者に對して行ふ行爲であるが故に、政治は自然界に存せずして人間界にのみ存し、又た政治は行爲であるが故に行爲をなす治者卽ち人が行ふものであり、而かもこの治者は數百千萬人に對し是を指導し命令し統一するものであるが故に絕對なることを要する、それ故に政治に於ては治者以外には絕對者は存在せざるものである、卽ち治者は絕對者であり被治者は相對者である。

然るに西洋古代の學者は自然界と人間界とを同一視し、法則と法律とを同一視したるが爲め自然界に法則が存するが故に人間界にも法律が存し、而して是の法律が絕對であり最高至上であるが故に、治者も被治者も共に法律に服從すべきものであるとの法律絕對說を唱ふるは眞に政治を理解せざるものであり、政治は治者たる行爲能力者卽ち體軀を有する君主がなす行爲であり、法律の如き抽象的なるものは絕對者にあらざることを理解せざるものであつて大なる誤謬である。

又た西洋中世の學者は宗教と政治とを同一視し政治の絕對者は神であるとの神權絕對說を唱へたることも亦た大なる誤謬であつて、政治は人のなす行爲であるが故に神の如き抽象的なるものは政治上の絕對者にあらざること明であり、政治上の絕對者は君主の如き人であるべきこと明かである。

又た西洋の近古の學者は民權絕對說を唱へ、多數の人民が政治上の絕對者であると主張するも是れ亦た誤謬である、何となれば政治は絕對者が非絕對者を治むることであり、而して治者は數百千萬人を治むるものなるが故

に絶對者であり、被治者は數百千萬人であるが故に相對者である、而して一人は絶對となし得るも多數人を絶對となせば既に絶對の意義を沒却するものであるからである、又た「マルクス」が唱へたる多數勞働者の共産政治の如きも誤謬であることは論ぜずして明かである。

是によつて之を觀れば正しき政治に於ては一人の治者は絶對者であり、被治者は相對者であり、卽ち君主政治のみが正しき政治であり、法權政治、神權政治、民權政治、共産政治の如きは眞の政治形態にあらざること明かであり、從つて是等の學說は眞の學說ではない。

第九節　道治と理治

政治は治者が被治者を治むることであり、卽ち治者と被治者との關係であり、君主と臣民との關係である、而して君主も臣民も共に人であるが故に、この關係は道であらねばならぬ、而して道は無條件であるが故に君主と臣民の關係も亦た無條件であり絶對であらねばならぬ、これ卽ち道による政治である、從つて政治上の君民關係を道となすならば君民關係は無條件であり、絶對であり、君は君の分として君の道を行ひ、民は民の分として民の道を行ふことであり、ここに君民の分位確立し永久不變なるものであり、君民の分位は絶對であり超脫し得ざるものである、斯の如くして理想の政治が行はるるのであり、從つて君民の分位か恒久に確立したる君主政治が眞の政治である。

然るに西洋の君權主義學說は政治の道を探求せずして政治の理を探求した、從つて政治上の君民關係を道となさずして理となしたるものである、而して理は因果であり有條件であるが故に、君主と臣民との關係も亦た有條件となり相對となる、卽ち西洋の學者は君主が何故に權力を有するやの理を探求して得たるものは君權武力說であり、君權契約說であつた、卽ち君權武力說は君主が武力なる條件を有するが故に民は君主の命令に從ふのであるが、君主が武力を失墜せば其の命令に服從するを要せざることとなり、是れ亦た君民關係が相對となり君主を放伐するも可なることとなる、又た君權契約說も然りであつて、君主が君民間の契約を遵守するならば民は君主の命令に服從するも、君主がこの契約を遵守せざれば君主の命令に服從するを要せざることとなり、卽ち君主を放伐するも可なることとなる、斯の如きは總て君民關係を道となさずして理となすより生じたる結果である。

政治の理想は至善の世界を實現することであり、永遠の平和を得ることである、若しも一時的に至善の世界を實現しても、其の後に於て戰鬪爭亂が生ずるならば、民はその生に安ずること能はざるが故に、最も重要なるは永遠の平和を得ることである、然るに國內に於て君主の位確立せず、君主が絶對ならずして相對となり、易姓革命又は君主放伐を繰り返し、是が爲め內亂を惹起すること屢々なるときは、人民は其の生に安んずること能はざるが故に政治の理想を實現する所以ではない、從つて君民關係を道となさずして理として政治を論ずるときは、絶へず內亂を生じ政治の理想に反するのみならず、國を治め世を安んぜんとする政治學の目的に反するものである、從つて理として政治を論ずる政治學は眞の學ではない。

第十節　德治と法治

政治は治者が被治者に對して行ふ行爲である、而して人の行爲は必然性と必爲性とによつて行はるるものであり、而して必然性の本質は力であり必爲性の本質は德であるが故に、行爲の本質は力と德である、それ故に政治

行爲の本質も力と德であり、而して其の力を以てするものは命令と刑罰とを以てする法治であり、其の德を以てするものは恩惠と敎化とを以てする德治であつて、是の兩者を並び行ふことによつて完全なる政治が行はるるのである。

然るに西洋の學者は政治を權力のみを以てする行爲と考ふるが故に、古來法律の絶對を唱へ卽ち法律の發布と刑罰のみによつて行ふべきものと考へたるにより、太古より法律が發達し「ギリシヤ」の「ソロン」の法律「ローマ」の十二銅鈑法の如きが存在し、而して「ローマ」の末期に於て「ユスチヤヌス」帝の欽定法典が成立する等法律は古代より著しく進歩し、又た學說としては法律法則說、神法說、自然法說、理性法說、等が存在し、從つて法律の兩面たる權利義務の觀念も亦た太古より存在し、遂に法律と權利とを同一視し、主觀的法律は卽ち權利であり、客觀的權利は卽ち法律であると唱ふるに至つた、是れ皆な政治は卽ち法治であるとの思想より來るものであるが、政治の他の一面が德治であることを知らざるものである、それ故に斯の如きは眞の政治學ではない。

上記の如く西洋に於てはその法律絶對の思想の爲め法律は著しく發達したが、德治に關して毫も唱道せざりしが爲め、惡德非道の君主輩出したるが故に、その古代に於て君主政治を廢して貴族政治又は民衆政治を行ひたることは「ギリシヤ」「ローマ」の歷史に於て見る所であり、中世以後の封建諸侯及び統一國家の君主に於ても惡德非道のもの多く、而して君主と人民とは政權を爭奪し君主は自己の權力を增大せんとして絶對權を主張し、人民は成るべく君主の權力を削減せんとして絶對權を否定し、斯の如き君民抗爭の結果生じたるものが議會であり憲法であつて、是れ皆な君民共に不德なりしことを證するものである、斯の如くなるが故に君主は如何に嚴刑酷罰を以て人民を統制せんとするも、民心を悅服せしむるに足らざるが爲め、遂に政治革命によりて廢位せらるるに至りたるものである、卽ち政治に於ては君主の道德が最も必要であり、法律のみによりては國家を完全に治むるに足らざることを證するものである、從つて法治のみの政治學は眞の學ではない。

第十一節　君治と民治

政治は治者が被治者を治むることである、從つて治者は被治者に命令し、被治者は治者の命令に服從することによつて行はるるものである、卽ち治者は命令者であり被治者は服從者である、而してこの命令と服從とが完全に行はれんには、命令者と服從者との分位が確立し治者は被治者に對して絶對であらねばならぬ、斯の如くして治者と被治者間に道が行はるるのである、それ故に完全なる政治は君主が絶對である所の君主政治であらねばならぬ、然るに西洋に於ては道を行はざる君主がありたるが爲め、遂に人民の怨嗟を買ひ君主政治を廢止せんとして學者は各種の說をなし、就中自然人權なる虛僞の說を構成し、これを根據として政治の絶對權は人民にありと主張して民主政治說をなし、佛國大革命以後各國は民主政治を實現したが、斯の如きは政治の變態であつて正態ではない。

元來西洋の學者が主張したる自然人權の如きは存在するものではない、權利とは治者が法律によつて被治者に與へたるものであつて、治者もなく法律もなき所には權利は存在せざるものであり、唯た道あるのみである從つて治者もなき法律もなき自然狀態に於て、自然人權の如きは存在するものではない、人は生れながらにして多くの人の恩惠によつて生存するものである、生れたる嬰兒は父母の抱擁によりて成育するものであり、學校敎師の敎育によりて一人まいの人となり、更に社會の多くの人の扶助と協力によりて生存するものであつて、一瞬間も他

人の慈愛や恩惠や援助によらざるものはない、是等に報恩すべき多くの責務を負擔するものであつて人は生れながら權利の如きを有せざるものである、斯の如くなるが故に自然人權說の如きは虛構の說であつて信ずるに足らざるものである、況んやこの人權は自由と平等なりと言ふに於てをやである。

又た西洋の學者が主張する社會契約說も亦た虛構の說である、國家は家族の如き單位社會が漸次に擴大し延長して生じたるものであり、人々が契約を締結して政治社會を構成したと言ふが如きは單なる理智的想像であり、人の有する感情を閑却したる虛構の說であり事實に反するものである。

斯の如き自然人權及び社會契約なる虛構の說を根據として造り上げたる民權絕對說が眞の學說にあらざること明かである、特に人民が政治上の主權者であると言ふことは、人民は治者であると同時に被治者であると言ふことである、同一の人が治者であると同時に被治者であれば、同一の人が命令者であると同時に服從者であると言ふことになる、斯くなれば命令の意義は全く沒却せれ、命令なる語は意義をなさざることとなる、是れ卽ち矛盾である それ故に民主政治は矛盾の政治である、從つて斯の如き政治が政治の正態にあらざること明かである。

又た民主政治に於ては人民が主權者である、從つて人民は直接又は間接の選擧により國家の元首たる大統領を選擧し、而して是の大統領が實際政治を行ふものであるが故に、大統領は名は主權者たる人民の被傭人であり內容は政治の實權者である、斯の如き名實相反することは旣にこの政治が矛盾を有することを示すものである、是れ亦た民主政治が政治の正しき形態にあらざることを示すものである。

蓋し政治は行ふことであり、行ふことは道に據らねばならぬ、然るに人民は或る時は治者であり或る時は被治者であると言ふが如き矛盾を行ふことは道を行ふことではない、道は治者と被治者との分位を確立し、分位を決定し是の分位を超脫することを許さざるものである、而かも民主政治は道に反して政治を行はんとするものであるが故に、これ一時の變態であつて恒久永遠に存續すべきものにあらざること明かである、從つて民權主義學說も眞の學說ではない。

第十二節　神治と物治

政治は治者が被治者を治むることであり人と人との關係である、而して人と人との關係を律するものは道である、物と物との關係若しくは人と物との關係を律するものは理である、而して道は必然と必爲とを兩立せしむるものであり、物質と精神とを兩立せしむるものである、それ故に政治に於ては物と心とを並び存立せねばならぬ、換言すれば政治に於て治者は被治者の精神的敎養を充足せしむることにより完全なることを得るものである。

然るに西洋の中世に於て神學者の主張したる神權主義學說は神を以て絕對となし精神に偏して物質を顧みず、現實世界は人の死後に於ける非現實界の準備期となし、從つて神の敎を奉ずる法王が君主の上に立ちて靈の政治をなし、君主は法王の下に於て肉の政治をなすべきものと主張したることは靈卽ち精神に偏して、肉卽ち物質を輕んじたるものであり、而して靈と肉とを兩立し精神と物質とを兩立することが道であることを知らざるものである、從つて神權主義學說は誤である。

又た西洋近世に於て「マルクス」「エンゲルス」等の主張したる物權主義學說はその唯物哲學と物質絕對說とを根據となし、物質的行爲卽ち經濟行爲が人のなす一切の行爲の基礎であり、宗敎、道德、政治、法律の如きは是に

從屬するものとなし、一切の精神的なるものを排斥し唯た物質のみによりて政治をなさんことを主張したるが如きも大なる誤謬であることは說明を要せずして明かであるが、是れ亦た道が精神と物質とを兩立せしむる所のものであり、心と物との中庸を得る所のものであることを知らざるが爲め斯の如き說をなせるものである、從つて物權主義學說も亦た誤である。

第十三節　誤謬と矛盾

前諸節に於て記する如く西洋政治學に於ける法權主義學說も、神權主義學說も、君權主義學說も、民權主義學說も、物權主義學說も總て誤謬である、其の然る所以は學者が人間界と自然界とを同一視し、且つ其の考へ方は對人行爲的考へ方によらずして、或は知識的に考へ、或は宗教的に考へ、或は對物行爲的に考へたるが爲めである。

政治は治者が被治者を治むることであり、人と人との關係行爲であるが故に、對人行爲的に考ふべきであり、而して斯の如き對人行爲に於て存するものは道である、從つて政治上行ふべき道を探求することが政治學の任務であらねばならぬ、然るに西洋の學者は道を探求せずして理を求めた、從つて政治を行爲的に考へずして或は知識的に考へ、或は宗教的に考へ、或は對物行爲的に考へたるが爲め多くの誤謬なる結論を得るに至りたるものであり從つて西洋政治學は眞の政治學ではない。

加之西洋政治學は多くの矛盾を包藏するものである、元來政治學は治國平天下の爲めの學であり、如何にして國家を安寧ならしめ如何にして天下を肅靜ならしむべきかを敎ふる學であらねばならぬ、然るに何故に君主が權力を有するやを詮鑿し、或は是を神意に歸し、或は是を武力に歸し、或は是を君民契約に歸するが故に君主は常に有條件的君主となり、而して君主が或は神意に背き、或は武力を失し、或は君民契約に違反するときは是は放伐し廢位するも可なりとの結論に達し、是を實行すれば或は反亂を惹起し、或は政治革命を惹起するに至ることは國家の安寧、肅靜を破るものであり、政治學の目的に反するものであり大なる矛盾である。

又た西洋政治學の主張する民權主義學說の如きは被治者たる人民が治者たると同時に被治者たるものであり、人民が命令者であると同時に服從者であるとなすものであり、斯の如きは命令の意義を沒却するものであり從つて亦た政治の意義を沒却するものであり大なる矛盾である。

上記の如き誤謬と矛盾に充滿しあるも西洋の學者は是を覺らず、學の根柢根據を究めずして其の枝葉末節のみを論じ、徒らに異說奇言をなして自ら誇となすも、斯の如きは學を玩弄するものであつて眞の學ではない。

第十四節　最大の誤謬

西洋政治學は上記の如く多くの誤謬と矛盾を有するが、其の最大なるものは實に政治を道德に無關係なるものとなす點に存する、卽ち西洋政治學は何れの學說に於ても政治の本質を以て權力のみとなし道德を無視するものである、蓋し政治は道に據りて行ふべきものであり、而して道は必然と必爲とを兩立せしむることであり、而して必然の本質は力であり必爲の本質は德であるが故に政道の本質は權力と道德であらねばならぬ、然るに西洋人は政治を單に權力を以てする行爲と考ふるが故にその政治は常に壓制暴政に陷り、唯だ治者が有する權力のみを揮ひ苛斂誅求と嚴刑酷罰とを以てするが故に人民を心服し悅服すること能はず、遂に人民をして反亂抗爭を逞ふする

に至るは西洋の歴史に於て常に見る所であるが、斯の如き權力萬能の政治は眞の政治にあらざること明かである。上記の如き權力のみによる政治を最も率直に告白したるものは「マギアヴェリー」であつた、彼は政治に道德は禁物であると主張し、又た君主は獅子であると同時に狐であらねばならぬと唱へ、唯だ權力と權謀術數とを以て人民を率いることが政治であると解したるは西洋政治の眞相を喝破したるものである、然しながら斯の如き政治は眞の政治ではない。

斯の如く政治の本質を權力のみと解したるが故に西洋に於ては、是の權力を命令化したる法律のみを重視し、政治は單に法律のみを以て行ふべきものであり德治の如きは一顧だに値せずとなすものであり、權力政治の當然の歸結であるが、是れ亦た大なる誤謬である、從つて西洋政治學に於ては治者が躬ら其の身を修め其の德を積み其の言行を愼むべきことを說かずして、唯だ治者は何故に權力を有するやのみを詮鑿し、こゝに君權神授說、君權武力說、君權契約說等をなすものであるが、是等の考へ方も唯だ權力のみを考ふるものであつて、政治に道德が如何に緊要なるやを考へざるものである。

斯の如き政治に於て道德を無視する權力思想を根柢となすが故に、西洋の政治は太古より現今に至るまで鬪爭を以て終始するのである、卽ち、古代「ギリシヤ」「ローマ」の政治は階級間の政權鬪爭であり、中世に於ては法王と君主との政權鬪爭であり、近古に於ては君主と人民との政權鬪爭であり、而して現時に於ては資本家と勞働者との政權鬪爭であつた、而して是が爲め常に國內的騷擾を惹起し、社會不安を惹起し其の極、政治的反亂、政治的革命を生ぜしめたるは歐洲の歷史に於て見る所である、而かも斯の如き政權鬪爭は國家を治め國家を安寧ならしめんとする政治學の目的に反するものであり、政治學としては大なる矛盾であるが學者は是を覺らず、「ギリシヤ」以來三千年その道德無視の傳統を持續するものであつた是れ實に西洋政治學に於ける最大なる誤謬であり最大なる缺陷である。

是に反し支那政治學も亦た幾多の誤謬と缺陷を有するものであるが、而かも政治に於て道德を高調し、殊に治者は有德ならざるべからずとなし、修身齊家を以て治國平天下の道となし、治者の言行を戒愼し、治者の德行を督勵する點に於て西洋政治學に比し優ること萬々である。（拙著人間界の哲學參照）

結論

吾人は前諸章に於て西洋政治學の諸說を詳論し批判し、更に是が綜合的觀察をなし是の學が多くの誤謬と矛盾とを有し眞の政治學にあらざる所以を指摘した。

元來西洋人は頗る理智性に富み至る處論理を構成し學其の結論の多くは誤謬である、其の然る所以は西洋の學者が學の根柢本幹を充分に完全に研究せずして枝葉末節のみを論ぜんとするからである、卽ち政治は自然界に存在せずして人間界に於てのみ存在するものであるが故に、先ず人間界を充分に完全に考察し、自然界と人間界とか如何に異るやを究めずして、輕率にも人間界と自然界とを同一視し、自然界の物を研究したる自然哲學をそのまま人間界に持ち來りて人間界の人を論じたるが故に誤謬に陷りたるものであり、又た政治は人と人との關係の上に行はるべきものであるが故に、先づ人の行爲性を充分に完全に考察し、然る後政治を論ずべきであつたが、彼等は輕率にも人の行爲性と知識性とを同一視し、知識は理性によつて得らるるものであるが故に、行爲も亦た理性によつて得らるるものとなしたることが誤謬であつた、彼等は

是を覺らずして人の理性のみを以て行爲を論じたることが誤謬であつた、更に西洋の學者は人と人との關係を充分に完全に考察せずして、輕卒にも物と物との關係に存する理を以て人と人との關係に於ても存するものと誤認し、人と人との關係を道を以て論ぜずして理を以て論じたることが誤謬であり、從つて又た人間界に存する規範を充分に完全に考察せずして、輕卒にも自然界に存する法則と同一なりと誤認し、この法則を以て規範を論じたるが故に誤謬を來たしたるものである、是れ皆な根幹を究めずして枝葉を論ずるものであつて西洋學の通弊である。上記の如く西洋政治學は、治者と被治者との關係卽ち人と人との關係を道となさずして、物と物との關係たる理となすが故に、政治の本質を以て權力のみとなして道德を顧みず、政治の手段を以て法律のみとなして德化を顧みず、從つて治者は被治者を力を以て壓制し壓伏せんとし其の權力を濫用したるが爲め、遂に政治革命を惹起するに至り、治者は被治者を統制するに嚴刑酷罰のみを以てしたるが爲め遂に怨嗟の聲を生じ、反亂を惹起するに至るのであつて、是れ皆な政治の道にあらざることを事實に於て示すものであり、西洋政治學が眞の學にあらざることを歷史的に證するものである。

現代の人は論理を好む、それ故に論理さへあればその論が如何に僻論であり、邪說であつても是を信ぜんとするものであるが、斯の如きは學に盲目なるものである、東洋の學の多くは論理を缺如し、其の結論のみを羅列するもであるが、然しなら學說の內容に至りては西洋の學に優れるもの頗る多きを見る、學者は須らく活眼を開きて學の內容を批判し檢討すべきである、殊に西洋以外に學なしと信ずるが如きは西洋崇拜の餘弊であつて、斯の如き弊風は斷じて剪除すべきである。

西洋政治學批判（終）

西洋政治學批判（終）

法律資料室

昭和九年六月一日初版發行
昭和十七年十一月十日再版印刷　二、〇〇〇部
昭和十七年十一月十五日再版發行

西洋政治學批判（改訂版）
定價金貳圓五拾錢
送料貳拾錢

著者　佐藤清勝
東京市小石川區小日向水道町五十三

發行人　高田俊郎
東京市小石川區小日向水道町五十三

印刷人　高島駒之助
東京市小石川區諏訪町五十六

印刷所　株式會社常磐印刷所
東京市小石川區小日向水道町五十三

發行所　豐國社
振替東京六九〇八八番
（日本出版文化協會登錄番號一三〇〇二三番）
東京市神田區淡路町二丁目九

配給元　日本出版配給株式會社

承認
協文
出
あ220055

佐藤清勝著書目錄

日本學叢書

大日本哲學……豐國社發行
大日本國體論……漢學普及會發行
大日本政治學……平凡社發行
大日本政治思想史……日本法令出版社發行
大日本精神讀本……祐文閣發行

西洋哲學批判叢書

西洋哲學批判……平凡社發行
西洋政治學批判……豐國社發行
西洋法律學批判……亞細亞青年社發行
西洋經濟學批判……平凡社發行

政治學叢書

世界に比類なき天皇政治……忠誠堂發行
政黨政治亡國論……方文社發行
美濃部氏憲法論批判……祐文閣發行
革新日本の政治原理……太陽社發行

哲學叢書

道の哲學……日本法令出版社發行
人間界の哲學……豐國社發行
支那哲學批判……近刊

Fuzambō
TOKYO